



筑紫女学園大学リポジット

A Study of Modernization Problems in Northern Part of Xin Jiang, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/54

中国新疆北部地区現代化における諸問題についての一考察

石 其 琳

A Study of Modernization Problems in Northern Part of Xin Jiang, China

Kirin SEKI

前言

2011年新疆北部に関するフィールド調査は、前回2006年の新疆南部地区の継続調査として行ったのである。中国新疆地区を含む西北地域は、土地の面積が広く、多民族が混住している。古よりこの広大な地域に居住し、中央アジアの広範囲に往来する多数の民族が漢民族と歴史的、文化的深く関わっていた。そして宗教的には地域と政治的、歴史的理由によって、主にイスラム教が盛んであるなかに、仏教が共存している特徴が顕著であり、現実には多くの難題を抱えている。

中国の現代化がすすむ中、新疆を含む西北地域も政府の西部大開発政策のもとで、改革と開発が迅速に進展しながら、社会全体もあらゆる方面から大きく変化が現れたのである。西北地域の都市周辺地帯は郷村との境界が明確でなくなりはじめ、草原地帯の計画管理、都市地区の拡大によって、少数民族農村の居民は絶えずにその都市周辺地区へ集中しはじめたのである。このように都市化が拡張するにつれ、逆に少数民族の農村が都市化された地域から孤立化されつつある。

今回の調査は、新疆自治区人民政府が設置される中国西部最大の都市で、新疆ウイグル自治区首府ウルムチ市から出発し、北へまた西へ向って、現在のロシア、カザフスタン、キルギス各国々の辺境地に沿って、天山を境に、北新疆をほぼ一周回ってウルムチに戻るルートで行ったのである。途中は多くの大小都市、郷村地帯を通過し、特に幾つかの重点都市富蘊、アラタイ、ブルジン、カナス、カラマイ、博楽、伊寧、石河子なども特別に見学できたのである。全体の調査ルートには遊牧民が生活を営む大草原地帯、辺境重点都市及び数多くの新開発都市、古都市、郷村におよび、現地の都市生活状況、さらに居住民たちを対象に、さまざまな実態調査も行った。

この広範囲な地域のフィールドワーク調査において、特に注目したいのは現在でも各少数民族実生活の問題の背後に、多くの歴史的、政治的、宗教的要素がかなり強く存在している点である。そして現代化に関わる経済的条件の背景は、これらの要素と絡み合いながら進展した現実が潜んでいることも重要視すべきである。新疆において、民族、資源、政治、歴史及び文化など複雑極まる地域の問題は、そう簡単には解決できないが、しかしそこで生活する住民たちには、時代風潮と共に意識の変化がみられ、新たな社会態勢と生活スタイルへ対応して生きる実態も随所に観察できる。これらの変化をより理解するため、本論は、今回の調査記録の写真を数枚取り上げながら、この地域の現代化に関する実態と現実問題を多視角に考察する。

第1章 多民族共存の歴史と現実の問題について

中国の歴史を概観すれば、現在世界遺産である万里の長城から北部にいる遊牧または狩猟を主として生業を営む北方民族と漢民族の間、絶えず抗争と交流の歴史が繰り返されたのである。その実情といえは、匈奴、鮮卑、氐、羌、羯を含む「五胡」という諸民族と秦、漢帝国との抗争、「突厥」と隋、唐帝国間、「契丹」と唐宋帝国間、「モンゴル」と漢民族王朝間、「満州族」と漢民族間の抗争が長い年月を通して、ともにこの広大な土地で中国の波乱万丈な歴史を作り上げたといえる。以下は調査の記録写真をもとに、多民族の歴史に関わる問題点を考える。

一 写真①に見る問題点

今回の調査で広範囲に移動する途中、少なくとも2回写真①のような内容のスローガンが見られた。車中から撮影した写真なので、全体が見えない部分もあるが、実はこのスローガンの全文は以下のとおりである：「団結稳定是福，動乱分裂是禍」、「団結し社会が安定すれば幸福につながるが、動乱分裂を騒ぐと禍につながる。」との意味である。この内容は2009年胡錦濤総書記が新疆ウイグル自治区の幹部大会で表明した各民族の和諧共処についての重要な発言である。

最近で言えば2008年オリンピック開催前の騒動に続き、2009年世界から注目された新疆ウルムチの暴動事件の発生後、この内容のスローガンがさらに強調されている。

この地域に関して、暴動が起こるたびに民族衝突が原因であると認識され、そして現代になって、特に単純に漢民族との摩擦が目立っているようにいわれている。上述のように歴史的に概観すれば、この地域は常に紛争と民族の混合が現在まで絶えずに展開されてきたので、結果的に今の雑居する現実に留まったのである。この歴史的現実がこの地域に不安定要素をもたらす最大の原因であり、その根が深く、事実上現地的一般住民にとっても、その歴史的状況理解に対して、完全な知識を得ずのまま、またさまざまな客観的要素が壁になり、きわめて解決困難な課題になっている。

地理的にいえば、新疆は南、北および西面が高山に囲まれ、東側だけに高山がなく、その上平坦な地域と連帯するため道路で中国中原地区と通ずるのである。この地形的特徴で、新疆は古より外部との交流が必然的に東へ向く傾向があった。またこの地理的自然環境の特殊な要素は、後に新疆の人文社会発展に大きな影響をもたらすのである。早い時期から、東西陸上の通路が繁栄に伴い、民族の遷移と交流活動が盛んに行われ、地区全体の人種と民族関係を複雑に交錯させたのである。考古学資料によれば、新疆古代居民は、欧州人種とモンゴル人種の特徴を持つと同時に、さらに多くの人種形態は、各人種分支類型を混雑にまたは変異の特徴がよく見られる。欧州人種の活動範囲は主に西部にあるが、東へ移動する実態も見られる。モンゴル人種の場合は、主に東部にいるが、西へ遷移する傾向も見られる。これまでの考古学資料から、新疆地区各人種の交流交錯の結果、モンゴル人種が優勢を占めたのは明確である。そして中国は古来より歴史を重視する習慣があるため、



写真①

古文献には常に新疆との関わり、新疆地区の全貌と中国歴代との関係がより確実に記載されているのである。新疆の問題を理解するにあたって、中国歴史とのかわりを認識せずに語ることは困難である。以下は、この問題に関係する時代と重要な歴史事実を重点的にみていく。

(1)先秦から漢時代の民族関係

中国の先秦時代の古文献には既に新疆に関する記載が多く、古墓から玉石が出土している事実により、中国中原地区との交流が古いことが証明されている。そしてシルクロードの出現は早くも春秋時代から始まった実態が、後に漢王朝が西域統一する基盤を作ったといえよう。漢代は西域との交流の事実が現在大量に出土した考古文物からも証明できる。商業発展のほかに、芸術文化の振興にもつながったのである。双言語考古文物の発見によれば、当時官方往来には、漢文も通用され、さらに各民族発展の需要に応じて、通訳の職業も既に存在したといわれている。もとはこの地域に対して「西域」の名称は、漢代の有名な歴史書《史記》に始まり、清末に「新疆」を「省」として設置するため、あらたに改名されるまでの約2000年間通用していたのである。《漢書》「西域伝」によれば、西域に36国あると記されているが、当時この「国」の概念は、事実上「城郭諸国」であり、現代の「国」と相違し、それぞれが部落的集団と考えられよう。西域の地形が高山とゴビ砂漠の閉塞性から、生活形態などさまざまな特異的要素が潜み、政治的管理は常に分割状態が続いたため、内部による統一が困難で、漢時代に初めての政治的統一がなされたと考えられる。

漢王朝が西域に政治的支配を拡大した大きな目的は、当時北方民族の強敵「匈奴」と対抗するためであった。BC60年、匈奴統治層内に動乱が発生し、その部落が漢へ臣服することにより、天山南北地域が漢王朝の支配下なり、「西域都護府」の設置がはじまったのである。西域都護府の設置により、天山南北が中央王朝の管轄下になり、政治社会の安定がシルクロードの開拓をさらに拡大させたのである。当時この辺境地において屯田制の実行は、軍事費用の負担を軽減し、地域経済、文化の交流、発展を促進させたのである。そしてこの支配方式はのちの時代の範例にもなったのである。

(2)魏晋南北朝時代における民族活動の実態

魏晋南北朝では、中原王朝も西域も激動の時代をむかえたが、相互密接に関連する状況を保っている。この時期には西域の民族大移動の局面が現れ、該地区の民族構成がさらに複雑化され、各部落集団から局部的政権の成立によって、局部的統一情勢ができていく。それは後の唐代が天山南北各地を統一する政治的基礎を築きあげたのである。

西晋後、中原地区は戦乱が頻発、黄河西地区から小王朝が出現したが、それらの政権には、漢民族の「前涼」、「西涼」のほか、氐族の「後涼」、鮮卑族の「南涼」、匈奴族の「北涼」がある。同時期に中原地区の政局不安のため、数多くの中原漢民族が河西地区から当時の高昌（現在のトルハン地区）へと避難している。この漢民族の集中により、高昌と周辺地区の繁栄をもたらしたのである。

この3世紀から5世紀の間、西域諸民族、部落の遷移、融合と政治的活動が活発になり、天山南北とタリム盆地周辺地域の各民族間の文化交流と民族の分化、融合をさらに促進させているのである。民族間の統合で、のちに文献から消え去る民族もあるが、同時に新たな民族の集団が出現することもあったのだ。この時期、特に注目するのは「突厥汗国」の建立と西域の統一である。突厥人

が西域における活動と政治統治は西域の民族の分布と文化発展の形態に大きな影響を与えたため、学術界では、この時期において、突厥人が東から西までの西域に対する征服過程を「突厥化（トルコ化）時期」と言われている。この視点は、近現代にも影響され、新疆の民族和諧と文化発展問題に深くかかわっているため、以下は「突厥」について語る。

(3) 「突厥」に関わる問題について

ここで「突厥」について特筆する理由は、1932年当時新疆の省都迪化（ウルムチ市の旧名）でムハメッド・イミンが新疆南部に「東突厥イスラム共和国」を建国する事件が起こり、わずか数ヵ月後に滅亡したのである。この事件の発生にあたって、その国名で使った「突厥」に対するこだわりは、上述したいわゆる「突厥化（トルコ化）時期」の名残であろう。

現在学術的に、「突厥語族」という概念がある。しかし古文献に標記される「突厥人」は、現代の「突厥語族」とは明らかな相違である。「突厥人」とは歴史的概念で、「突厥語族」は現代言語学的概念である。「突厥語族」とは一つの民族ではないため、混同すべきではない。「突厥語族」は現代言語学において、アルタイ語系の3大語系の一つに属する。「突厥語族」は歴史上数十個の部族を含み、分布地域は現在の中国、トルコ、アゼルバイジャン、サイプラス、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、キルギスタンなど十数カ国と地区である。現在中国国内の「突厥語」民族はウイグル、カザフ、ウズベク、キルギス、タタール、サラール、ユークなどの族で、主に西北部の新疆、甘肅、青海地区に居住している。古代突厥汗国の滅亡後、突厥人はさまざまな民族に融合され、一部分は現代突厥語族各民族の祖先のなかへ、またはモンゴル人へ、漢民族へ統合同化されている。要するに、現代突厥語族は古代突厥人とは子孫関係ではないのである。現代突厥語族は、それぞれ自分の祖先が存在し、もしくは突厥人の祖先より早く歴史の舞台に出現しているが、また同時代に同じ土俵で活動をしていた事実もあった。中国の重要な歴史文献《通典》、《新唐書》、《旧唐書》には突厥とその支配下の部族について「異姓突厥」と「突厥別部」とを記載している。さらに南北朝と隋唐時代北方の重要な遊牧民族「鉄勒」という通称がある。正史《隋書》巻84、《北史》巻99、《旧唐書》巻194と197の記録では、《突厥伝》と《鉄勒伝》両方記載があり、明確に区別されている。唐代重要な部族回紇（のちにウエイグル族となる）について、《旧唐書》巻195に《回紇伝》とは別に《突厥伝》巻194が記載され、《新唐書》にも同様である。

唐時代以後、突厥汗国は582年に東西分裂され、東突厥は630年唐王朝によって一時滅亡されたのである。その後一旦復活し中原地区の唐王朝と友好関係が続いたが、最終的に内乱によって8世紀ごろ消滅したのである。東突厥の残部は中原地区に遷移し、漢化が進み漢姓を名乗り中原の王朝にも仕えることになった。西突厥も内部分裂により、8世紀ごろ一部突厥部族がウイグル族に統合され、また一部分は中央アジアと砂漠南部へ遷移し、歴史舞台から消え、中央アジアの民族または中原地区の漢民族と同化されたのである。

6世紀から8世紀まで突厥の強力な政治活動は、後に多くの痕跡を残している。9世紀以後の「突厥」を指す言葉は中国古文献と違い、特にイスラム系文献において突厥語を話す人の総称と認識され、中国の歴史書にある意味と本質的に相違する。上述の古文献と多くの研究資料によれば「突厥語族」は特に9世紀以後全く古代の突厥人と血縁も部族縁がないし、直系の後裔でもない事実が明

らかである。「突厥語族」の理念から19世紀末ロシアで比較言語者が提示した一つの言語学の概念は、その後教育と言語の改革活動と共に、「汎突厥主義」までに広がり、のちにイスラム思潮と連携し、宗教が政治と統合した結果、その意識の蔓延は現在の中央アジア地区にも拡大され、常に民族問題のマグマ的存在として世界から警戒されるのである。その思潮の流れは当然現代中国のこの新疆地区にも多大な影響を及ぼしている。

最近2008年、2009年新疆に騒乱が起こって以来、全域に警戒的雰囲気漂っているなか、今回調査中厳しい警備が随所に見られた。写真①のスローガンではまさにその問題の深刻さが知れると同時に、その対策の一側面もうかがえ知れよう。「汎突厥主義」の問題は中国だけでは解決できないが、しかしそれと関連して新疆地区の複雑な民族背景は、歴史的既成事実として、社会安定を維持するためこれからも警戒し続けるであろう。

二 写真②と③に見る問題点

写真②は新疆全域を回って、都市につけられている通り名に注目した。写真では「四川路」であるが、実は今回調査で経過した各都市に必ず「北京路（北京通り）」が存在するのである。この写真に二つの問題点が考えられる。その1は、「四川」と言う中国内地の地名を通りの名前に命名すること。その2は、漢字で表記することの重要性である。

その1について、通り名の決め方として、国の有名都市の名称を使うことは別に珍しくはない。だが新疆において、この現象は特に重要な意味と目的があると考えられる。実際にはほかに「友好通り」（民族友好）、「文化通り」（文明開化の社会へ）、「団結通り」（民族団結通り）などの名称もみられる。それぞれの内容に込められた統治側の思いと期待がうかがえる。そして単純に通り名で住民がみずから中国に住み、「中国人」としての再確認を深めたいだけでなく、政治支配力を明示する目的もあったと考える。

その2について、新疆境内に関わらず、他の少数民族の居住地の自治区と同様に、公的機関のほか、市内の大きな商業看板から写真③ウルムチ市内にみる住民が経営する小さい食品の屋台まで、必ず現地の民族文字と漢字を両方標記するのが一般的である。漢字で表記する背景には、少数民族の自治区には昔から漢民族が多く移住している現実があり、共通中国語の漢字を明記すれば、読める住民層のほか、流動人口も含め人口が多いから商業的に有利であろう。行政は学校教育以外に、生活



写真②



写真③

全般において漢語（中国語）を共通語として、完全に定着させたいと考えている。この辺境地域の政治支配には、雑居する住民間のコミュニケーションが最も大事である。

中国の各民族の分布状況が大雑居と小集団的ある局面が一般的である。歴史上民族形成過程中の融合と分化も言語使用に直接影響するのである。長い年月の結果、各民族の言語相互兼用は一般的現象である。例えばウイグル語はカザフ族、シボ族、キルギス族、ウズベク族、タタール族、タジク族に兼用されている。またカザフ語は新疆地区に住む一部分のタタール族、キルギス族、モンゴル族にも兼用されている。そして民族言語転用の事実もある。それは一つの民族の中に一部分の人が自民族の言葉ではなく他民族の言語を使用することである。結局一つの民族に多言語が存在することになる。またある民族全員が他民族の言語を転用することになれば、その民族の母語が消えてしまうのだ。このように言語と民族は絶対的に一致する関係ではない実態が明らかであろう。

今回の調査には数名のウイグル族が同行している。新疆北部地区はカザフ族、モンゴル族、シボ族などの多民族共住が多い地域であるため、途中少数民族同士でそれぞれの民族言葉を使用する場面も多かったのである。上述「突厥語族」の問題に関係するのだが、ウイグル族とカザフ族とは民族言語が相違するが、互いに理解することもあった。実はこれこそ中央アジア史上の突厥化による最も深刻な変化からもたらされた現象であろう。同じ言語ではないが同じ突厥語系であるため理解できたのである。そしてアルタイ地区からさらに北部へ、西へ行けば、やはりカザフ族、モンゴル族が多く住む地域に、言葉が通じない場面も少なくない、その時全員は当然のように「漢語(中国語)」で言葉を交わすこととなる。あるウイグル族のひとは「漢語」使った方が、互いに誤解が生じないので、安心できると語った。ここで取り上げた内容、例えば言葉の問題について、実に些細な日常現象とはいえ、それが現在新疆地区における一般的生活の実態である。言葉は人間同士のコミュニケーションに欠かせない重要な要素である。「漢語」はある意味で、この多民族混住する地域において重要に位置づけられている。そしてこの実態に至るまでの背後には、過去シルクロードの盛んな時代による商業的なニーズの名残のほか、現代における中国政府の民族分裂の抑制、和諧と安定を求めるための苦心と努力がうかがいしれよう。

三 写真④に見る問題点

写真④は最北辺境近くのブルジン市の夜市にあった光景である。写真内の屋台は焼き物を売っているが、その宣伝文句にはロシア人のおばあさんの顔付で「本場俄羅斯（オロス）おばあちゃんの味の焼き物だ」と書いてある。わざわざオロスの普通のおばあちゃんの味をアピールしたいのは、そこに潜むオロスとの日常的関わりの深さを露呈している。



写真④

歴史上現在の中国の領土よりも広い領土を西域まで統一したのは二回ある。その一回目は1279年のモンゴルフビライが建立した元王朝である。その後二回目に歴史上中国の領土が最大の面積に達成できたのは、満族の清王朝による全中国の統一である。この二つの王朝はともに中原政権以外の

民族であり、互いに長年西域地区で多民族における紛争と活動をたどってきたのである。清王朝は支配力を主張するため、境外地のような通称「西域」の名称をやめ、新しい領地として「新疆」と命名する。同時に内地行政同様に「省」を設置し、以後中央政府の直轄管理となったのである。さらにその政治の中心、現在のウルムチを「迪化」と呼んだ。反抗する勢力を教化する意味合いを含むことによって新中国の建国後、差別的名称として「迪化」ではなく、その土地の風情をあらわす美しい牧場の意味の「ウルムチ」に改名したのである。

この時、新疆辺境地は当時のロシア政権と隣接し、歴史上ロシアとの交錯事件が明らかである。ここでは詳細な説明は省略し、重要なポイントだけに触れる。1851年ロシア政府は初めての条約「中俄伊犁塔爾巴哈台通商章程」の締結を清政府に迫ったのである。条約の内容に、領事の設置、貿易免税権承認など、実に不平等な項目が組み込まれ、その後幾度も清王朝に対して一連の不平等条約を強要したのである。実はロシアから19世紀の40年代以後、すでに巴爾喀什湖以東以南の土地を奪われ、1864年「中俄勘分西北界約記」の条約にサインすることを強要され、約44万平方キロメートル面積の領土を失っている。辺境ブルジン市から南の伊犁地区も1881年「伊犁条約」の締結により、一度奪われた土地が再び清政権の支配下に帰されている。新疆の近現代史において、まさにロシアとの土地、民族に関する紛争は長期にわたって起こり続けている。現在西北に隣接しているカザフスタン共和国の建立は、旧ソ連が崩壊した1991年である、その間新疆と隣接しているロシアがこの広大な辺境地に多大な影響を、庶民生活にまで浸透できたのも無理はない。実際に街の中にロシア語の表記も見られるし、本場ロシアおばあちゃんの味は、現地におけるおふくろの味に近い存在ではないだろうか。当然このような生活実態も新疆の民族政治問題の難題が重層的潜んでいることを示唆していると考ええる。

第2章 宗教の共存実態と問題点

一 写真⑤に見る問題点

写真⑤については各地でよく見られる光景である。北部のブルジン市内のレストラン入り口のドアに「大肉」を大きく書いてあることに注目したい。この店には大肉を売っていることを公示している。「大肉」とは「豚肉」を指して、イスラム信者が多く住む地域では、豚肉を食べることがタブーであるため、このように豚肉の代用語として「大肉」と呼ぶのである。ほか



写真⑤

にもいくつかの俗な言い方が使われているが、ようするに、感情的にイスラム信者に嫌悪感をもたらさないための対策である。当然現地では既にこの商売の仕方に対して黙認されている。実際に大肉を購入する人々は漢民族のほか、イスラム信者ではない人々が顧客である。特に現在観光地として海外から外国人観光客も大勢来るため、食文化には多様性のニーズが求められる現実もある。商売方法を考慮しながら共存するのがこの地区の現実であり、昔から庶民生活に欠かせない知恵であ

ろう。

さて、この「大肉」の問題はただ単純に豚肉を食するか否かの問題ではない、イスラム信仰がこの地域に浸透する背景には宗教だけに留まらず、政治的にも大きな影響をもたらしたのだ。以下その点について考える。

二 宗教問題が近現代民族の形成との関係

13世紀の中国史上、初めて建立されたモンゴル族の元王朝は、その政治力が後世西域に及ぼす影響は膨大である。天山南北と中原地域の関係をより密接に連携させ、西域の多民族の融合と近代的民族の形成発展を強く促進させたのである。元朝後期には内紛迭起、西域の統治はチャガタイ汗国に委ねることになり、よって天山南北各地の政治、経済、文化を強制的に一体化させた事実を重要視せねばならない。14世紀チャガタイ汗国が東西に分裂し、「西」は広大中央アジア地区に属され、「東」は天山南北諸地区を支配することとなる。この東側の政治体制はその後興起した中原地区の明王朝とも密接に関係を持ち続けたことで、清王朝の西域統一の基盤作りに重大な意味をもたらしたといえる。10世紀から既に天山南部にイスラム教勢力が統治的地位に占めている実態から、チャガタイ汗国の後裔の強力な推進によって、天山北部のイスラム化も拡大され、さらにモンゴル貴族団のイスラム化がすすみ、16世紀から西域全体の諸民族は、仏教信仰からイスラム教へ転化することになった。当然宗教の転化過程において、相当に強制的または残酷的な手段が使われた事実も知るべきであろう。結果的にこの事実から特に注目すべきなのは、これまで西域における宗教を含める多元的文化局面が変化をあらわしはじめたのである。この時期には、民族の遷移、融合がさらに頻繁に起き、かつて強勢なモンゴル族も現地のその他の民族に同化融合され、民族の交流が濃厚になり、思想文化、社会概念の新たな組み込みによって、主に突厥言語系とイスラム信仰の文化体系が主導的地位に定着するようになった。そして現代的カザフ族、ウズベク族、キルギス族、回族、ウイグル族が定形し始めたのである。「大肉」を堂々と売っている店をよく目にする街において、上述した歴史背景を理解し踏まえて、現在新疆北部地区諸民族の生活実態を観察することが重要である。

第3章 経済開発と生活形態の変化について

現在新疆に関して最も関心を集めるのは、民族問題のほか当然経済開発の状況であろう、以下は違った視点で、開発にともなう多様な問題を見る。

一 写真⑥に見る問題点

2000年、西部開発計画をスタートさせて以来、新たに開通した道路は約9万1千キロメートルである。そして今回調査での走行距離は約5000キロ以上になる。当然ほとんどの道路は整然とした高速道路である。これら道路の建設には、中国にとって政治統治にも民族問題にも欠かせない重要なインフラ整備であり、経済文化発展の生命線である。上述した新疆地区の歴史的現実を考えれば、

昔以上に多民族、多様性文化を高速道路の交錯によって、その地域だけではなく、全国さらに外国との交流を促進させることができる。複雑な住民意識の改革をもたらし、相互理解を高め、社会安定につながるであろう。昔からのシルクロードの気風は現在でも辺境地で見られる。近年新疆辺境に中央アジアとロシアの貿易進展がすみ、継続して数か所に「口岸」（国境検問所）の設置が辺境関係にもたらす重要なポイントである。



写真⑥

写真⑥にはホルカスの口岸にある国際商貿センターの風景である。各店で販売されている商品は新疆現地生産物のほか、東から中央アジア周辺国ウクライナ、トルコ、ロシア、韓国など多くの国から運ばれたものがみられる。新疆は初めて「阿拉山口」口岸を1990年開放されてから、現在は隣接の相手国とだけではなく、第3国の人も通行できるように開放している口岸が多くなり、その後口岸は6か所まで増え、新疆西北国際物流中心地区となっている。調査中ホルカス口岸では中国からカザフスタンへ輸出する大型トラックが数十台、税関の広場で通関待ちをしている光景が見られた。また出境通関手続きのため、ロシア、カザフスタンなどから大型コンテナトラックの列が出来ている。大型トラックが頻繁に往来できるように便利になったことから、国際間物流の隆盛実態が知れる。さらに物流だけにとどまらず、異国間の人的往来も昔以上頻繁にできるようになっている。以下は経済発展によってもたらされた都市化の進行とともに、多民族であるこの地域の人口流動も多くなるなかで、「異民族間の結婚」問題に関して触れる。

二 「異民族通婚」の問題について

第1章写真①に強調されているように、多民族の和諧のため異民族通婚が一つ自然的でかつ有力な近道であろう。古代では戦乱また政治不安定が続く中、各民族が広域に遷移することが多かったため、自然に各民族人種の融合ができていた。歴代王朝において、政治の安定を求め、和親政策（政略結婚）も統治階級では珍しくないほどだった。それで庶民の間も交流と異民族通婚が一般化された事実もあった。だが決して民族の間の壁は突破されたとは言えない現実がある。21世紀の現在、実際個人を対象に調査した一般ウイグル人は、まだ他民族との結婚を望まない考えを持つことが少なくないようである。

本来西域地区に関して、歴史上異民族同士の融合と混血は複雑な背景によって、常に行われたのである。調査中伊寧市に住むウイグル人の自宅を訪ねたが、対象者の妻の姉がカザフスタンの阿拉木圖（アルマトイ）へ嫁に行ったことについていろいろ語ってくれた。上述したように、そもそも中央アジアの政治歴史の複雑性と突厥語化（トルコ語化）をはじめたことによって、人的移動、交流と融合が長時間にわたる混血現象の結果、諸民族の間に身体的特徴の変化も現れている。例に現在のウイグル族を見れば、インド、ヨーロッパ系の顔つき、または身体的特徴を持つ人が少なくはない。よって異民族との結婚には違和感が希薄ではないかと思われた。しかし実際ウイグル族のAさんにこの問題をたずねてみたが、やはり現在でも一般的にいえば、自分の世代のことを含めて、

子供世代にも他民族との結婚は許せないようである。しかし現在新疆地区の教育レベルが高くなり、これだけ昔以上に人的の交流が活発になれば、少数民族と漢民族またはほかの民族と結婚する機会が増加し可能性も大きい。例え親が子供の結婚を反対しても、次世代が親の反対を受け入れない状況に変わることもあり得る。なぜなら今日結婚はすでに昔日のイスラム社会のしきたりのように宗教によって承認されるのではなく、本人同士が法定年齢になれば、法律によって承認される客観的環境が既に整えられている。時代の変化が親であっても止められないだろうとAさんは考えているし、そしてこれはAさんだけの結婚観ではないことも明らかである。

またウイグル族といえは、歴史上注目される突厥部族よりも早く文献に出現した古い部族であり、多くの部族集団によって構成されたのである。中央アジアソグト族の文字をもとにウイグル文字を作って、後のモンゴル文字と満族文字の基礎を固めたのである。強力な軍事力と物質、精神文明をもって西域における長い歳月の分合起伏を経て、突厥部族以上の地位を得たのである。さらにこの地域のウイグル化を促進させ、現在まで新疆における主的存在になったのである。この現実はどこかに主流意識を生じさせ、上述した結婚観について、ひそかに影響をおよぼしたのではないだろうか。

三 遊牧の現代化と生活形態の変化

新疆北部は草原地帯の面積が広いので、カザフ族、モンゴル族、キルギス族、タジク族などが遊牧民族で、牧畜生産を営み、生計は畜産品に頼っている。清末から民国初め頃、徐々に季節によって順番に草場を利用する「輪牧制度」に変わり、牧民たちは定居せずに集団で放牧し、ゲルで遷移生活をしている。20世紀80年代中期から、遊牧が時代遅れとする論調によって牧民の定居が進められたが、政府政策の試行錯誤の結果、80年代以後、再び個人牧民生産が伝統的形と相違する新遊牧形態で復活されたのである。人口と牲畜数の増加で牧民は完全に自然の牧草に頼ることができなくなり、新たに牧草を植え補助しなければならぬ。1984年以後牧民は一般に政府から配布された50年間使用できる牧場で放牧している。1999年全新疆地区でこのような牧民は全体の約8割以上占めている。「定居」とは、集中定居、分散定居、移動型定居など多様である。牧民は配分された耕地内小麦（食糧）トモロコシ（餌）ごま（油）苜蓿（牧草）などの農業生産を行っている。牧農業兼営方式は、各牧民家庭の経済レベルを向上させ、自給能力を高めたのである。とくに重要なのは、伝統的牧畜方式の改善であろう。牧草を植えることで、牲畜の冬と春牧草不足状況を解決でき、場所によれば冬にも転移せず、秋収穫後の耕地で放牧し、夜は圈飼い方法が行われている。この方法では、厳しい冬と春牧草成長の緊迫状態を緩和させ、また昔牲畜が「夏飽、秋肥、冬瘦、春死」の悪循環を防げるのである。今回のフィールド調査した各地区もこの生活形態を取り込んでいるところが多く見られる。このように畜牧生産と農業生産が結合後、遊牧の生活形態にも変化が現れ、昔と違って、風雪をさけるための山奥に定居地を構えずにすむのである。現在は牧民の定居点の多くは、比較的交通便利なところに構えているようである。実際高速道路で草原地帯を走ると、所々に「牧業通路口」を示す看板が見られるのだ。実はこのライフスタイルは、彼らにはもうひとつ生計を助ける生業をもたらしている。それは観光産業である。以下はこの点について検討する。

四 観光産業の展開と問題点

さて、上述の内容から、現在北新疆遊牧民の生活実態の一側面がうかがえるが、ここでは、彼らのもう一つの生活に触れてみたい。北のアルタイ市からさらに北へ、ロシアと隣接する辺境地に有名なカナス湖があり、観光シーズンになると、国内外から大勢の観光客がやってくる。牧民は美しい大自然の風景と遊牧生活を体験するために、この地へ訪れた観光者を自分たちのゲルへ招き、羊料理と現地で取れる食材で作った自家製のナン、ヨーグルト、はちみつ、ジャムなどを提供し、食事代として臨時収入を得るのである。彼らに実際の生活状況を尋ねると、羊と牛を百単位の頭数を飼っている。毎年それを売って生計を立てているのである。観光シーズンでしか稼げない収入は、夏場特に放牧のため、草原に泊まりの生活をしながらできるので、主な収入源ではないが、生活の足しにもなるし、楽しみながら続けているそうだ。実は、草原地帯を回ると、このような個人的観光業をやっている牧民のゲルは随所に見られる。個人操業のため、時には管理が行きとどかないことも生じるだろう。実際現地のカザフ族牧民の話によれば、この収入は決して悪くはないため、多数の人々がやっているようだ。

今回新疆最北アルタイ地区のブルジン県にあるカナス湖観光地区で、牧民たちのゲル村をたずねた。写真⑦は、このゲル村に住むBさん夫婦が自分たちのゲルに来てくれる観光客のために、食事を作っているところである。Bさんの長男は既に高校生のため、近くの都市の学校に通い、寮生活をしている。牧民の教育環境を整えることも定居生活に欠かせない条件であろう。Bさんは冬定居のため家を別に持っているが、夏場はほとんどここで過ごしているそうだ。これが上述したこの地区牧民の生活の実態である。



写真⑦

各少数民族地域に関する観光産業は、政府が積極的に推進する経済分野である。この地区では観光季節になれば、日々大型バスが数十台単位で国内外から観光客を載せて押し寄せて来る。アルタイ地区の調査中、ある外部者と現地牧民間の文化理解と知識の不足により、触れ合う際に矛盾が生じ、衝突して命に関わるほどの事件まで発展してしまうことも実際に起こったのである。そして一方大自然の環境保護問題など様々な問題も無視できないのである。政府側はこのような問題に対して、かなり深く注意を払っていることは事実である。

私はこれまで多くの少数民族地域をフィールド調査し、常にこの問題に触れ論議しているので、ここでは深く討論しないが、環境問題と言えば、欠かさず連想するのはゴミ問題である。そしてこの地域の独特な光景として、写真⑧のように一面広大な草原地の路上に置かれているゴミ箱が随所に見られる。さまざまなデザインに工夫されたゴミ箱は、人の目を引くのだが、環境保護政策が行きとどいたことを示唆している。そ



写真⑧

して本当にゴミを箱の中に捨てるよりも、そのきれいな大自然の環境を汚さないことを人々に警告し、環境保護の意識を高めて行くという狙いがあるであろう。ゴミ箱の上に「環境保護は、私から実行します。」と個人の環境保護意識を高めようとの文句があった。実際現地においては、観光施設及びホテルなどの多いところでは、大型ゴミ収集車がよく往来している。草原は本来牧畜たちの食事の場であるので、汚染は許せないのが遊牧暮らしの基本であろう。問題は観光開発による多数の観光客の進入による多くのゴミを作りだし、草原地区へ持ち込む問題であろう。

カナス湖観光区の環境保護について、個人観光者の自由な車乗り入れが禁止され、必ず用意されたガイド付きの電動バスに乗って区内環湖観光をしなければならないなど、ほかの少数民族観光地区にも見られる整えられた政策を取り込んでいるようである。実際今回調査中に通ったウルムチから約500キロ以上離れている美しいサイリム湖も観光開放された当初、船を使って湖中の島まで観光者を運んでいたが、水が汚染することを防ぐため、完全にその航路をやめたそうである。このように環境保護に対しては、政府側の認識のもとで政策として取り込み解決することが出来るが。上述した外部者と現地の民族との衝突に関しては、相互的知識、文化教養の問題に関わるため、事件が発生しても、やむなく公安機関に管理と解決を委ねるしかなく、事実上課題として解決困難な一面もあるだろう。

終わりに

今回の調査は主に北新疆が対象であったが、前回の南新疆と明らかに異なるのは、混住している民族が多く、そしてそれらの民族がすべて各自の波乱万丈な歴史背景をもち、モンゴル草原から南ロシア草原地帯へ数万里へと繋がる中央アジアとの関連性が、極めて複雑な痕跡が、今も所々に形を変えて残っている。この地は遷移と戦乱が絶えずに行われ、古い歴史の舞台に時期的に大きな政治集団が成立し、また消えていくさまざまな痛ましい現実が潜んでいる。多様な経済、文化活動を残し、中国の歴史に重要なページを数多く書き残し、漢民族とまた多民族同士の融合、同化にも深くかかわった地域である。これだけ濃厚な歴史、宗教と絡む多民族共存地域であれば、第一章で触れたように、民族の統合と平和共存が最も注目される問題であり、重要視せねばならない政策の目標かつ重い課題であろう。

歴史上多くの時代における戦乱のため、避難、統治側の軍事防衛または庶民的経済の理由によって、すでに早い時期から漢民族が新疆へ移住している。近現代になると、人口の増加に伴い、経済発展が求められ、新たな都市開発と開拓が進んで来たのである。

1949年より、新中国政府は歴代「屯墾戍邊」の伝統に沿って「新疆生産建設兵団」を成立させ、内地から大量の退役軍人、政治犯、知識青年、天災難民、農民など様々な労働移民を送り込んだ。改革開放後、大規模の出稼ぎ移民潮が各地で出現したなか、新疆もますます有望な移住地として注目された。90年代より農業、貿易、鉄道、石油、観光など経済分野の隆盛のため、新疆の外来移民数は年々増加し続けている。今回調査拠点の一部分として、漢民族人口が比較的集中している石河子、奎屯、カラマイなどの都市は、すべて荒原上に建てられた数十年の歴史しかない新しい現代都

市である。軍隊の駐屯によってできた都市もあれば、カラマイのように石油の採掘によってできた都市もある。この大規模な移民潮には、新疆へ移住する場合もあれば、逆に新疆から外へと、少数民族がほかの地域へ出稼ぎに行く人口移動も多くなった。結果的に、漢民族と混住する状況が各地で増加し、避けられない現実になっている。当然今後経済開発が更に進み、企業の関係者も増えるなか、また違った形の漢民族の移住が多くなることは想定できるだろう。

新疆は面積が広いという地形的条件により、遊牧とオアシス農業が古より最適な生活形態であると同時に、閉鎖的一面も持っている。21世紀からでは、現代化された遊牧形態が新たにこの土地で再確認されたことにより、騎馬民族としての誇りを持ち続けるだけではなく、時代とライフスタイルの変化により、多方面における価値観の変化も自然に適応していくであろう。これが今後この土地で、多民族が共存するに欠かせない条件であり、進展すべき道ではないかと考える。

主な参考資料

民族學概論	楊群 著	上海社會科學院出版社	1998
中華民族源流史	呂思勉 著	九州出版社	2009
中国少数民族文化通論	徐万邦 祁慶富 著	中央民族大学出版社	1996
中亞的民族關係歷史現狀与前景	潘志平 主編	新疆人民出版社	2003
中国北方諸民族的源流	朱学渊 著	中华书局	2002
中国的民族關係和民族發展	余振 達哇才仁 主編	民族出版社	2003
中國民族語文工作	金星華 主編	民族出版社	2005
西域通史	余太山 著	中州古籍出版社	1996
突厥史	薛正宗 著	中国社会科学出版社	1992
突厥史話	何星亮 郭宏珍 著	五洲傳播公司	2008
簡明新疆民族史	陳超 著	香港誠諾文化出版社	2009
簡明新疆歷史	田衛疆 著	香港誠諾文化出版社	2009
簡明新疆宗教史	馬品彥 著	香港誠諾文化出版社	2009
西北少数民族地区城市化及社区研究	高永久 著	民族出版社	2005
中国史の中の諸民族	川本芳郎 著	山川出版社	1997
内陸アジア史の展開	梅村坦 著	山川出版社	1997
中国民族志	杨圣敏 主編	中央民族大学出版社	2003
中国民族理論研究二十年	金炳鎬 主編	中央民族大学出版社	2000
中華民族研究初探	陳連開 著	知識出版社	1994

(せき きりん：アジア文化学科 教授)

(本論は2011年度 筑紫女学園大学個人研究補助金による研究成果である)

